

新型コロナウイルスがもたらした対人不安と、 アフターコロナの対人関係へ向けて

企画・司会 佐藤恵美（東京富士大学）

話題提供者 佐藤恵美（東京富士大学）

銅直優子（流通科学大学）

花屋道子（東北文教大学）

指定討論者 濱 保久（北星学園大学）

キーワード：新型コロナウイルス、対人不安、コミュニケーション

【企画の趣旨】

新型コロナウイルス(COVID-19)は、私たちの生活に大きな影響を及ぼしている。この感染症は飛沫感染なので、対人接触を極力減らすことが感染予防とされている。さらに、感染を拡大するクラスターの発生は連続的に集団発生を起し(感染連鎖の継続)、大規模な集団発生(メガクラスター)に繋がる可能性があることから、クラスター形成の機会を減らすことができれば、COVID-19の感染拡大を相当程度抑えることが可能である(2020年7月国立感染症研究所)。

そこで、厚生労働省は新型コロナウイルスを想定した新しい生活様式を呼び掛けている。新しい生活様式の実践例として、①一人一人の基本的対策、②日常生活を営む上での基本的な生活様式、③日常生活での各場面での生活様式、④働き方の新しいスタイルの4つを挙げている(厚生労働省,2020)。私たちはこの新しい生活様式に従って日々を過ごしているが、この新しい生活様式はさまざまな方向性をもって私たちの生活を少しずつ変えているようにも思われる。対人関係やコミュニケーション・スタイルの変化は、よほどの社会的転換が起きない限りなかなか変化することはない。しかしながら、この新型コロナウイルスの蔓延は身体疾患の防衛に関する変化だけでなく、対人的な関係性や教育・産業場面における心理的な変革をもたらす可能性を持っている。そこで、本ワークショップは、新型コロナウイルスがもたらした対人不安とアフターコロナの対人関係について考えていく。

まず、1つ目の一人一人の基本的対策では、人との距離を取る社会的距離(ソーシャル・ディスタンス)やマスクの着用が課題となる。社会的距離の対策により電車での座席とその距離、飲食店での透明なついたてなど、他者とのパーソナル・スペースが従来よりも大きく取られるようになった。また、マスクの着用は息苦しさや暑さによる蒸れ、顔を隠すわずらわしさがあるが、感染防止に必須の衛生用品である。しかし、感染対策として日常的に使用することでマスクは自分の顔のほぼ半分以上を隠せることができるツールとして、マスクで他者からの視線を回避するという、これまでにない使用方法を述べる人も少なくない。これは他者と物理的に距離を示す防御反応のような使い方であり、アフターコロナにおいてもこのような使用法は残るかもしれない。

2つ目の日常生活を営む上での基本的な生活様式では、三密の回避が課題となる。この対策は対人接触を回避することで感染予防なので、教育業界では何ヶ月かの学校の閉鎖や、運動会や修学旅行などの行事の中止により学習活動に大きな制約が生じている。大学も遠隔授業に切り替えられ、対面授業に戻りつつあるが、度重なる政府からの宣言によって授業運営方法が変更され、教育効果への影響を指摘する声もある。また、友人と交流を持つ場や教員との触れ合いなどの減少により、学修以外の大学としての二次的機能も失われている。これは、産業場面でも新入社員において同じ現象が起きている可能性がある。

3つ目の日常生活での各場面での生活様式は、買い物、食

事、公共機関の利用、娯楽やイベント等への参加への制限が課題となる。飲食業界では食事中の会話という至って普通のコミュニケーションが感染防止の観点からタブー視され、そのような会合が持たれたことが判明するたび、メディアやSNS上でのバッシングにつながるなど、緊張感の高い状況が続いている。

4つ目の働き方の新しいスタイルは、対面接触を避けるためのテレワークやオンラインの使用が課題となる。インターネットの普及によりコロナ以前も多少使用されていたが、教育や産業における急激な全面オンラインは予想していなかっただろう。この課題はコンピュータとその回線を手に入れることが必要であるため、コストや居住に関する問題も生じる。また、テレワークが可能な業種とそれが困難な業種があるといった問題や、雇用形態の違いによってテレワークを認められない人々も多く、業績の悪化から雇用を見直される人も少なくない。

このように新しい生活様式は感染予防対策という生活の変化だけでなく、対人関係やコミュニケーションといった心理的要因にも影響を与えている可能性も含めて、これらの変化がアフターコロナに及ぼす影響も含めて考察する。

【話題提供1(佐藤恵美)】新型コロナウイルスを想定した4つの新しい生活様式を概観し、新しい生活様式から生じる行動と社会的変化による心理的变化について考察する。新しい生活習慣は感染症がなくなれば自然と消滅するものもあるが、対人接触を極力なくした日常は今後の生活や対人関係にどのような影響を及ぼすのだろうか。今後の人間観家の構築とライフスタイルの変化について考察していく。

【話題提供2(銅直優子)】日常生活において、ウイルスは視覚的にとらえることができない。そのため、コロナウイルスが流行してからは、誰かが咳をすると、そこにはウイルスが存在するのではないかと不安に襲われた方も多いのではないだろうか。しかしながら、このような不安が強い者もいれば、弱い者もあり、不安が強ければこれまでと同じように対人関係を維持することが難しくなると思われる。目に見えないコロナウイルスへの不安の感じやすさの要因の一つとして、神経症傾向があると考え、今回、大学生を対象におこなった調査から、神経症傾向とアフターコロナの対人関係に関する不安や心配の関係について検討していきたい。

【話題提供3(花屋道子)】真剣に人の話に聴き入っていると、本人としては真顔のつもりが「怖い」と言われることが多かったが、マスク生活に入ってからそう言われることがめっきり減った。いけないと思いつつの運転中の悪態も、口の動きや表情がマスクで覆い隠されているおかげで他者に知られず、円満な人物のふりができてしまっている。マスク生活には不平不満が付き物だが、その不満の思いの丈と同時に、気づいてしまった良さ・便利さに関して、周囲の学生たちに尋ねてみた結果を紹介しながら、アフターコロナのマスク事情、特に表情の呈示や読み取りの側面について考察する。

(さとうえみ、どうべたゆうこ、はなやみちこ、はまやすひさ)